

2001年2月

ポスター

475(S-401)

P-289 子宮体癌の血管造影における進行期の評価と TAE 併用 CDDP 術前動注化学療法

市立岸和田市民病院
塩田麻理, 白井孝昭, 立山一郎

【目的】子宮体癌においては術前の進行期推定が困難な例が多く(新FIGO分類において術後分類による進行期分類が採用されている),そのためNeoadjuvant chemotherapyの施行に支障をきたしている。今回我々は、子宮体癌に対しTAE併用CDDP術前動注化学療法を行い、その術前と術後診断を血管造影における所見および画像診断の変化とともに比較した。また、術前動注化学療法の長期予後に与える影響を統計学的に検討を加えた。**【方法】**当科にて患者の同意のもと、術前動注化学療法および手術を施行した子宮体癌38例を対象とした。全例において病理組織診断、画像診断および血管造影時の所見にて術前の進行期を詳細に検討した。これによる術前の推定進行期分類ではI期3例、II期20例、III期8例、IV期7例であった。Seldinger法にて腫瘍栄養血管を詳細に同定し、CDDP100mg/m²,THP-ADR40mg/bodyを約10分間かけて注入した。その後、TAEを併用した。同方法を原則として3クール施行し、再度進行期を推定し、その進行期に応じて手術を行った。**【成績】**血管造影所見では腫瘍栄養血管は子宮動脈のみならず、意外にも卵巢動脈、外腸骨動脈領域、腹腔動脈領域にまでおよぶ症例も認めた。これは、画像診断等にて推定した以上に腫瘍が広範に及んでいる可能性を示唆していた。約89%の症例においては腫瘍栄養血管を網羅することが可能であり、術後診断ではI期以下に縮小していた。**【結論】**TAE併用CDDP術前動注化学療法時の血管造影所見は、術前の進行期の推定の一助となると考えられた。さらに、これによりDown Stagingの効果を認め、長期予後に關して極めて有効な方法であると考えられた。

P-290 新規ビンカアルカロイド・コノフィリンの子宮体癌における抗腫瘍効果に関する検討

慶應大¹, けいゆう病院²
入江琢也¹, 久布白兼行¹, 竹原京子¹, 藤井多久磨¹, 福地 剛¹, 塚崎克己¹, 鈴木健治², 吉村泰典¹, 野澤志朗¹

【目的】我々は、新規ビンカアルカロイド・コノフィリンが、*in vitro*において子宮体癌細胞の浸潤能を抑制することを明らかにしてきた。一方、NF-κBは遺伝子発現を調節する転写因子として働くと同時に、腫瘍増殖に影響を与えることが知られている。そこで今回、コノフィリンが子宮体癌細胞の運動能・増殖能に与える影響について検討し、またNF-κBの転写活性を解析した。**【方法】**1)ヒト子宮体癌由来株SNG-IIをウェル内で培養後、ウエル中央部の細胞をはがし、細胞の運動能を測定するwound assayを行い、コノフィリンを添加した際の影響を検討した。2)ヌードマウスにヒト子宮体癌由来株HOOUAを皮下移植し、腫瘍が形成された時点でコノフィリンを投与し、腫瘍重量を測定した。3)SNG-IIに、NF-κB応答因子が挿入されているレポーター遺伝子をトランスフェクションした。遺伝子導入細胞に、コノフィリンを添加後、NF-κBの転写活性を測定した。**【成績】**1)wound assayにて0.03~0.3μg/mlのコノフィリン添加によって、SNG-II細胞の運動能は30~65%と濃度依存的に抑制された。2)ヌードマウス移植腫瘍の重量は、コノフィリン投与後14日目にて300±20mg、一方非投与では710±180mgであり、コノフィリンの投与によって移植腫瘍の重量は約50%減少した。3)SNG-II細胞に対し、コノフィリンはNF-κBの転写活性を0.3~30μg/mlの濃度において33~74%と、濃度依存的に抑制した。**【結論】**コノフィリンは子宮体癌細胞の運動能や増殖能を抑制する作用を有することを明らかにし、その機序の一つとしてNF-κBの転写活性の抑制が関与している可能性を示した。

P-291 子宮癌肉腫における癌腫成分と肉腫成分の悪性度の比較—血管新生とアボトーシスを用いた検討—

福井医大¹, 福井・済生会病院²
黒川哲司¹, 吉田好雄¹, 鈴木由里子¹, 西川有紀子¹, 河原和美¹, 佐々木博正¹, 福野直孝¹, 小辻文和¹, 紙谷尚之²

【目的】血管新生の異常亢進やapoptosis機構の異常が腫瘍の悪性度と深く関わることが多くの腫瘍で報告される。子宮癌肉腫は、癌腫と肉腫の2成分より構成される悪性度の高い疾患である。本研究では、この腫瘍の悪性度に関し、これら2成分のいずれが重要であるかを検討するために、癌腫成分と肉腫成分の血管新生とapoptosisを比較検討した。**【方法】**インフォームドコンセントの得られた子宮癌肉腫10症例を対象にした。初回手術摘出物より作成した10%ホルマリン固定パラフィン包埋標本を用い、原発巣、リンパ節転位部の組織像を検討した。次に各々の成分における新生血管とアボトーシス細胞の発現を検討した。新生血管はCD34抗体を用いた免疫染色法で検出し、最も新生血管の多い5視野(x40)の血管数より血管密度を算定した。アボトーシスの検出にはApop-Tagを用い、検出頻度の高い5視野よりApoptotic indexを算定した。**【成績】**新生血管密度は、癌腫成分($121.1 \pm 11.96 \text{ mm}^2$)が肉腫成分($66.8 \pm 16.95 \text{ mm}^2$)に比較して有意に高く($p=0.003$)、Apoptotic indexは肉腫成分(0.679 ± 0.575)が癌腫成分(3.992 ± 1.427)に比較して有意に高かった($p=0.002$)。組織学的検討では、リンパ節転移部位はすべて癌腫成分であった。**【結論】**子宮癌肉腫においては癌腫成分の方が肉腫成分より悪性度が高く、本腫瘍のmalignant behaviorにより重要な役割を担うことが示唆された。

15ボ
日
火
ス
タ
ー